

---

Double Wind **ダブルウィンド**

R y u

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Double Wind      ダブルウィンド

### 【コード】

N0536BA

### 【作者名】

Ryu

### 【あらすじ】

はるか未来でさまざまな宇宙次元を守る少年、月光ヤイバ・・・  
自然と共に過ごしてきた世界、ロスティアのトアル大陸の田舎の少女、フロル＝ウィンディア・・・  
彼らの出会いにより運命は動き始める・・・

動き始めた運命(前書き)

Double Wind・・・それは二つの風・・・

## 動き始めた運命

10000XXX年

ネオ東京

チャタイン研究所

ここに宇宙、次元を守る組織があった……

「……ふむ、この辺りの空間は大丈夫か。」

モニターを眺めながらそう呟いているオレンジ髪の眼鏡をかけた人物の名はチャタイン、仲間たちからはチャタイン博士と呼ばれている。

「今日はこれくらいでいいか、そろそろ……ん？」

チャタインが椅子から腰を上げようとした時、モニターに黒い影の様な物が映る。

「これは……!」

次の日

## 研究室

「・・・チャタインのやつオレたちを呼ぶなんてどうしたんだろうな。」

チャタインに呼ばれた白銀の髪の少年の名は月光ヤイバ、数々の戦いを乗り越えてきた戦士である。

「どうせまた変な実験に俺たちを使うだけじゃないのかい？」

続いて言葉を発した背の低い黒い長髪の男性の名はシャイン＝トライン、皆からはツッコミ王と呼ばれるツッコミの専門家である。

「誰がツッコミ王じゃあああっ！、あと背が低いとか専門家とか余計だあ！！！」

「誰に話しかけているんですかシャインさん？」

「い、いや何でもない・・・」

「それにしてもどうしてチャタインはぼくたちをよんだんだちゅん？」

さらに発言したクリーム色のぬいぐるみのような生物はぺつとちゅん、ぺつとちゅん族と呼ばれる地球外生物である。

「そりゃあやつぱり俺たちを実験に・・・」

「シャインはともかくぼくとヤイバはありえないちゅん。」

「どういう意味だ！！！」

「はいはい、二人ともケンカはそこまでー」

二人の言い合いを若干ふざげ気味の声が仲裁する。

「チャタイン！」

「さあ三人ともそのワープ装置に乗りたまえ、無論拒否権は無い。」

「いきなりかい！せめて要件を言え要件を！」

「えー、めんどくさいなあ・・・」

シャインの反論に対し反抗的な態度をチャタインはとる。

「チャタイン、オレたちを呼んだのは訳があるんだろ？」

「まあそうだね・・・（ヤイバは普通の反応だから面白くないな・・・）」

チャタインはつまらなそうな表情をする。

「仕様が無いから愚かな君たちに馬鹿でもわかりやすい様に説明して上げるよ、有り難く思いなさい。」

「・・・すげームカつくな。」

チャタインの発言にシャインはイラツとする。

「実は昨日、次元環境を調査していたんだけど妙な影がかかった世界があつたんだ。」

「なんだって!?!」

「このまま放っておく訳にもいかないだろう？だから君たちに異変を調査、解決して欲しい。」

「ええっ!?!」

三人は少し困惑する。

「・・・そりゃあ構わないけどよ、その世界はどこの世界何だよ？」  
「僕の集めたデータによると化学よりも自然が基準になっている世界だ、ちなみに何をすれば良いかはこの天才である僕が通信をとる事に成功したその世界の大妖精って人に聞いてね、その世界の世界樹にいるから。」

「割と情報少ないな・・・」  
「いいじゃないですか、目的がはっきりしているんですから。」

情報の少なさに文句を言うシャインをヤイバが納得させる。

「・・・そろそろ出発してもらおうか、新たな世界・・・ロステイアへ！」

ヤイバ、ぺつと、シャインは転送装置に乗る。

「また始まるんだな・・・オレたちの旅が。」

「いつもどおりのめんばーだからだいじょうぶちゅん、さっさとおわらせてかえつてくるちゅん！」

「はあ・・・変な事に巻き込まれなきゃいいんだけどなあ。」

「では頑張ってくれたまえ・・・」

それぞれの想いを胸に三人は旅立って行くのであった・・・

ここはロスティア・・・

化学よりも自然を中心として発展してきた世界・・・

この世界では人々は自然と共に生きている・・・

そして・・・物語は一人の少女と異世界から来た戦士たちの出会いから始まる・・・

トアル大陸

ソヨカゼ村

フロルの家

「ん・・・」

一人の少女が目覚めます。

「もう・・・朝？」

この少女の名はフロル。ウィンディア、黄緑の透き通った髪と翡翠の様な綺麗な瞳が特徴的な少女である。

「うーん・・・少し外の空気でも吸おうかな。」

フロルは服を着るとゆっくりと家から出る。



「・・・学校の子供たちのところに顔を出しておこうかな。」

フロルは村にある小さな学校へと向かう。

「あ、フロルお姉ちゃんだ！」

「みんな、今日も元気にしてる？」

「うん！でも実は・・・」

「・・・？」

「隙あり！」

「へ？・・・きゃあっ！？」

突然フロルのスカートを何者かがめくり、子供たちにスカートの中があらわになる。

「大成功！お前らよくフロル姉ちゃんを引き付けた！」

「キリト！？またあなたね！」

「油断してるフロル姉ちゃんが悪いんだよ！」

「うー・・・」

何故か反論しないフロル、しかしキリトはさらに言葉を続ける。

「それでもあの魔剣士レヴィアタンの弟子かよ、そんなんじゃないよこの辺の魔物にも負けちゃうぜ。」

「・・・そんな人物に剣術習ってるのは何処の何方だったかな？」

フロルは飽きれ気味の顔でキリトを見て言う。

「・・・し、仕様がないうじゃん、だってこの村に戦い方を知ってるのフロル姉ちゃんしかいないじゃん！」

「・・・じゃあそろそろ森に行かなくちゃいけないから、じゃあね。」

めんどくさくなつたのか、フロルは家に一旦戻る。

「さてと・・・森に行く準備をしなきゃ。」

フロルは森に行くための準備を整える。

フロルが森へ行く理由・・・それは日課である大妖精への御祈りをするためである。

「・・・これでよし、さて出発！」

弓と矢を携え意気込むフロル、そして彼女は森へと向かう。

### 風の森

「・・・」

静かに目を閉じて風を感じるフロル。

「いつ来てもここはいいところだなあ・・・」

・・・そんなことを言っている場合では無いでしょう。

「はっ、森の奥まで行って大妖精さまに御祈りしなきゃ・・・！」

フロルは我に返ったのか、再び歩き出す。

「・・・おかしい、魔物たちが殺気立ってる。」

しばらく歩いていたフロルは魔物たちの様子に違和感を感じた。

何故ならば魔物といえ、本来この辺りの魔物たちはそれほど凶暴でなく滅多に人間たちに敵意を向けないからだ。すると一匹の魔物がフロルに襲いかかる！

「きゃっ！」

フロルは魔物の攻撃をギリギリでかわす。

「スライム・・・！この子達は滅多に人を襲わないのに・・・」

スライムはフロルに明らかかな敵意を向けていた。

「ごめんね、少し痛いかも知れないけど・・・」

フロルはスライム目掛けて矢を放つ。

「・・・！」

矢はスライムに突き刺さり動きを封じ込める。

（何か異変がおきているのかも・・・）

フロルはそう思うと森の奥を再びめざす。

「ついた・・・」

フロルは森の最新部(?)につくと目を閉じて地面に座り、両手を合わせ静かに祈り始める。

(大妖精オベロンさま・・・)

フロルが静かに祈っていると辺りが不思議に光始める。

「・・・何なの!?!」

すると空から二人と一匹が降ってくる。

その団体は地面に勢いよく墜落した。

「いててて・・・」

「ここがロスティアちゅん・・・」

「なるべくこの世界の住人に会わないようにする・・・ぞぞ?」

「そ、空から人が・・・」

「見つかっちゃった・・・」

「あはははは・・・」

フロルに姿を見られたヤイバたちは笑うしかなかった。

「あ、あによっ!?!」

「噛んだぁー！？」

フロルが何かを喋ろうとしたが噛んでしまい途中で言葉が中断される。

さらにそこへシャインがツツコミを入れる。

「しゅ、しゅいまひえん・・・あ、あの、あなたたちは一体？」

「・・・うーん、どうする？」

「・・・ちゅん。」

フロルに自分たちのことを聞かれヤイバとぺっとは少し悩む。

「どうしたんですか・・・まさか何かやましいことでも・・・」

「いや、それは断じて無い！オレたちはただこの世界に起きている異変を解決しに異世界からやって来たただけだ！」

「・・・へ？」

「あっ、しまった！」

フロルに言われたことを否定するためヤイバはつい口を滑らせてしまった。

「・・・」

「・・・異変って何ですか？」

「ええっ！気にするとこそっち！？」

ヤイバの言葉に反応するフロルだが彼女が気にしたのはこの世界に起きているであろう異変の方だった。

「えーと・・・」

「もうバレちゃったし話してもいいんじゃないか？」

「・・・そうだな。」

ヤイバはフロルの疑問に答えることを決意する。

「・・・じつは異変そのものはオレたちにもわからないんだ。「え・・・あなたたちも原因は知らないの?」

「ああ、でもチャティン博士が大妖精に会えばわかるって言ったんだ。」

「チャティン博士・・・?」

「チャティンは俺たちをこの世界に送った張本人で天才化学者なんだ。「じゃあオレたちは先を急ぐから・・・」

「待って!」

ヤイバたちが先を急ごうとするとフロルに呼び止められる。

「その旅に私も付いて行っていいかな・・・?」

「ええっ!?!」

フロルの突然の提案にヤイバたちは驚く。

「何があるかわからないんだぞ、危険だ!」

「・・・でも私たちの世界の問題でしょ?あなたたちだけに任せるのはおかしいと思う。」

「・・・」

「それにもしこの世界に異変が起きているとしたら・・・黙って見過ごす訳にはいかないよ!」

「・・・わかった。」

フロルの言葉に納得したのかヤイバたちはフロルの同行を許可する。

「ただし自分の身は自分で守るんだ、それと知り合いとかには旅立つことを知らせること、いいね？」

「わかったよ、それじゃ村まで案内するから付いて来て……」  
その瞬間だった。

「っ!?!うわあ!」

「きゃあっ!」

突然フロルたちへ向けて火の玉が飛んでくる。

「くっ……誰だ!」

「くくく……見つけたぞ風の巫女。」

突然現れたのは赤いマントと仮面に身を包んだ男だった。

さらにフロルのことを風の巫女と呼んだ。

「風の巫女……?」

「私たちの村で年に一度行われるお祭で私がやっている役のことです……」

「なんで村祭の役をやっているだけの少女を狙っているんだ。」

「ふん、何も知らんようだな。」

男は鼻で笑いシャインにそう言い放つ。

「その女は風の魔力を持つ本物の風の巫女なのだ。」

「フロルをどうする気だ!？」

「ここで始末するのだ、大人しく女を引き渡せば貴様らは見逃してやる。」

「……大人しく渡すと思うか？」

「ふん、貴様のような正義の味方ぶっているやつを見ると虫酸が走

る！』

男は剣を構えヤイバに突撃する。

「うおおおお！」

ヤイバも男の攻撃に対し背中に背負っていた大剣を降り下ろし反撃する。

『ほう・・・やるな。』

「・・・オレの力はまだまだこんなものじゃない！」

「俺たちもヤイバに加勢するぞ！」

「ちゅん！」

ヤイバに続きシャインとぺっとちゅんも男に向かって行く。  
シャインは槍を使って戦いぺっとちゅんは丸まって突進する。

『・・・鬱陶しいやつらだ！』

男は炎を纏った剣技でヤイバたちを尻ぎ払う。

「ぐあああっ！」

男の攻撃によりヤイバたちは吹き飛ばされる。

『死ねっ！』

さらに男はとどめと言わんばかりにヤイバに向けて剣を降り下ろそつとす。



「やらせない！」

しかしその瞬間フロルは矢を男に向けて放つ。

「むっ、でえええいつ！」

男は瞬時に反応し矢を撃ち落とす。

『慌てるな、貴様は最後に殺してやる。』

男はフロルに威圧的に言い放つ。

「うおおおっ！」

『むっ！？』

ヤイバは起き上がり再び男に斬りかかる。

『無駄だ！』

男はヤイバの攻撃を受け止める、しかし・・・

「でいやあああっ！」

シャインも起き上がり男に槍を振るう。

『何！？』

男はシャインの攻撃も受け止めるがまた更に攻撃が続く。

「ちゅーんっ！」

ぺつとちゅんは大砲の如く男へ突撃した。

『ぐおおっ!?!?』

ぺつとちゅんは男の腹に深く突き刺さる。

『調子に・・・乗るなアアアツ!?!?』

男は再びヤイバたちを剣で尻ぎ払う。

「ぐあっ!」

『もう遊びは終わりだ、手加減はせんぞ!?!?』

男はヤイバに向かって猛攻を仕掛ける。

「くっ・・・さつきよりも攻撃が鋭くなっている!」

『うおおおおっ!?!?』

男の攻撃は続きヤイバの体力を徐々に削る。

「ぐあっ!?!?」

『とどめだあっ!?!?』

男がヤイバにとどめをさそうと剣を振り上げる、その時であった。

「やめてー!?!?」

フロルが男に向けて矢を放つ、しかしその矢は緑色の光を纏い物凄いスピードで男に突き刺さった。

『ぐああつ．．．風の魔力を纏った矢だと!?!』

「はあ．．．はあ．．．今は．．．?」

『くつ．．．やはり貴様から始末してやる!』

男は狙いをフロルにかえて突撃する。

「．．．!?!?」

『死ねええつ!!!』

男はフロルに向けて刃を降り下ろした、その時だった．．．

「．．．．あれ?」

男の刃はあと少しと言つところで止められていた、謎の剣士によつて．．．

『き、貴様は．．．!』

「．．．．．」

「あ．．．．」

異世界から現れた者．．．突如現れた謎の敵．．．そして謎の剣士．．．

フロルたちにこれからどんなことが訪れるのか．．．  
今静かに運命は動き始めた．．．．．

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0536ba/>

---

Double Wind ダブルウィンド

2012年1月1日01時46分発行